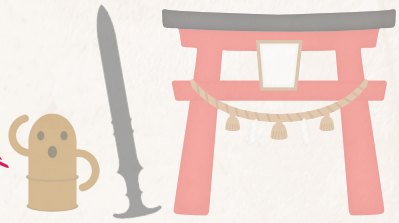
むかしむかし

昔々のそお市

郷土を知る

社会教育課 文化財係 ☎ 099-482-5958



第11回

聖地 三五郎の墓

財部町の古井原に平田三五郎という武士の墓があります。

島津家臣の平田三五郎と吉田大蔵は「生きる時も死ぬ時も一緒」と義兄弟の契りを結びます。

そして、慶長四年（一五九九）の庄内の乱（庄内合戦）に二人は参陣、古井原での乱戦の中、大蔵は討死します。その死を確認した三五郎は「今こそ約束を守る時」と、敵陣に切り込み討死します。見目麗しき美少年で、まだ15歳の若さだったといいます。

この三五郎の行動に島津家の人々は感動し、その忠義の精神は、薩摩武士の鑑（かがみ）であるとして、物語『賤（しず）のおだまき』が綴られ、二才衆（にせしゅう）の間で愛読されました。

やがて人々は、この物語の主人公に会おうと、墓参りに来ていたようです。江戸初期は、土盛りの塚でしたが、参拝客が多かったのか、後に子孫が墓石を建てています。

その後も、多くの薩摩武士が参詣したようで、西南戦争（明治10年）の際には、西郷軍で種子島出身の鮫島甚七が、戦闘の無かった時に、三五郎墓へ参詣したと、日誌に記しています。恐らくは郷中教育で教わった偉人の墓を一目見る絶好の機会と思っての行動だったと思われます。

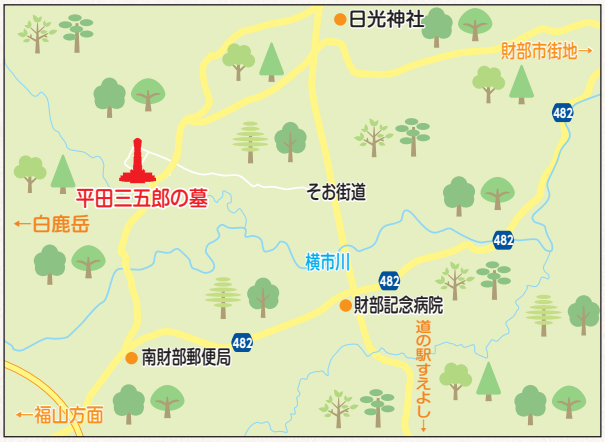
明治38年（一九〇五）には、墓石が劣化したのか、子孫が新たに造り直し、現在に至っています。

また戦時中は、軍神のような扱いを受けており、墓石の正面を削り、石片を御守りにしたといい、その痕が確認出来ます。

このように三五郎の墓は、江戸期は薩摩武士にとっての聖地であり、戦時中は戦の守り神として信仰対象となり、鹿児島の人々の心に深く根付いていたようです。

なお明治以降、三五郎の物語は、森鷗外の『キタ・セクスアリス』や旧長岡藩士の本富安四郎の『薩摩見聞記』等により、鹿児島独自の文化の一つとして全国的に知られるようになりました。

平田三五郎の肖像画・墓

平田三五郎の掛軸

財部郷土館には、梅の下で天吹を奏でる三五郎の掛軸を展示しています。作者は服部英龍（一八四二―一九〇五）という国分出身の絵師で、日当山温泉で療養中の西郷隆盛の肖像画も描いています。